

幸運との邂逅

野尻俊明

一九六九年四月、小さなバッグ一つを手に関東鉄道竜ヶ崎駅に降り立ち、三〇分以上かけて大学にたどり着いた日のことは、半世紀以上経った今でも脳裏に鮮明に浮かんでくる。

あの日、複雑な思いを抱いて急な坂道を登ってキャンパスに立った新入生に、こうして多くの皆様のご尽力とご協力で『流経法学論叢退職記念号』を贈呈いただけただけの幸せが訪れようとは誰が考えただろうか。一番想定外との思いをしているのは、ほかならぬ自分自身である。長年にわたりお世話になった現旧の教職員の皆様、とりわけ法学部の教員皆様、そして本号に素晴らしい巻頭言をご寄稿いただいた周作彩教授（法学部長）、佐藤尚人教授（社会学部）、古井恒教授（流通情報学部）には、心から感謝申し上げる次第である。

私の大学生活のスタートは、学生寮への入寮であった。当時本学には三つの学生寮があったが、私が入った

のは第一学寮六号室であった。そこは六畳一間に二人での生活、プライバシーはほぼ皆無であったが、全国各地から集まった同級生たちとの掛け替えの無い貴重な交流の場でもあった。同室となったのは富山県出身のS君であったが、同君は極めて社交的な気質の持ち主で、新学期が始まって早々学寮外に多くの友人を作り外出することが多く、結果的に第一学寮六号室は当方の一人部屋のような状況となってしまう。この結果、六号室が一種の集会場のような機能を果たすことになり、四六時中誰かが消灯時間まで部屋にいて実質的な一人部屋どころか、寮内でもっとも人の出入りの多い部屋のひとつとなっていた。

資料によれば、一九六九年度は本学への入学志願者四五〇名、入学者三三二名とある。一・三六倍と決して厳しい倍率の入学試験ではなかったが、多くの学生は高校時代までの自分に不満をいだき、歴史のない新設の大学で自分らしさを探し出し、新しいこれからの大学の歴史に自身で一ページを書き加えたいとの意気が感じられた。

寮から教室には友人達とともに出かけたが、現在の教養ゼミの相当する「小クラス」と呼ばれた授業は、強く印象に残っている。担当は当時経済学部長であった松本達郎教授で、履修した学生は七名であった。テキストとして大塚久雄著『社会科学の方法』（岩波新書）を使ったが、本の内容は難しすぎて大学一年生には荷が重いものであった。ただ、大塚先生の高弟であった松本先生の解説を聞くと、一行一行の文章に重みが伝わり、学問の難しさ、奥深さを感じることができ、これが本当の大学の勉強、学問というものかと勝手に思い込んでいた。松本先生からは、「岩波新書を一〇〇冊読破せよ」という指示と、授業が行われていた経済学部長室の窓の外の庭に見える「赤いバラはなぜ美しいのか?」という難問が出された。前者は結局四年の年月を費やして何とかクリア、後者は四半世紀の年月を費やして私が社会学部の助教授に就任し松本先生と同僚となったのち、ある宴席でのやり取りで一応及第点をいただいた、と勝手に解釈して今日に至っている。

この「小クラス」こそが、本学において今日にいたるまで全員・少人数ゼミ制を教育の基本と位置づけ重要視してきたものの嚆矢であり、今後も末永く継続していただきたいと思っている。

また、生涯の恩師となる佐伯弘治先生とのご縁も、一年生の時にいただくことができた。後期授業が始まってしばらくたったある日、四年生で大変お世話になっていたM先輩が、次の日曜日に就職の相談で狛江市の佐伯先生のご自宅に行くことになっている。佐伯先生から野尻と一緒に連れて来いといわれているので付き合え、と言う。何のことやらわからなかったが、ともかく二人で電車で揺られて佐伯先生のご自宅に伺った。先生のご自宅でゆつたりとした時間を過ごさせていただき夕食までごちそうになり、学寮に戻ったのは深夜になっていた。当日の話の内容はほとんど忘れてしまったが、ご自宅の二階の書斎に案内されて膨大な蔵書をみせていただいたのが強く印象に残っている。先生曰く、「必要な本は自費で購入せよ」とのこと、その後この教えは現在まで固く守っている。もともと、退職にあたり、大学の研究室や自宅の多くの蔵書の整理に大いに苦労するとは、当時は思いもよらないことであった。

自分のことを引き合いに出すまでもなく、学生は教員との教室内外での交流を通じて刺激を受け、その将来を左右することがある。学生との交流は、職業として教員を選んだ者の責任でもあり、また最大の楽しみでもある。私も可能な限り学生諸君との交流を深めたいと努力してきたつもりであるが、教え子たちからの評価はいまだ不明である。しかし、ゼミや部活等で交流のあった諸君についてはいつも気にかけている。母校で長い教員生活を送らせていただいたが、学生諸君との出会い、その後の交流に勝る財産はない。

一方、授業が始まって早々新入生の間でもちきりとなったのは、「この大学が無くなるようだ」といううわさ話であった。学生の中に日本通運の幹部社員の子弟が何人かおり、日本通運の社内での話題が火元であったようだ。それが我々学生には「この大学が他の大学に買収されたい」、「大学の名前が変わるようだ」と

いった極めて刺激的な話として伝わり、学生の不安な気持ちを増幅させていった。新入生である私も、真相がわからないまま途方にくれ、前途を悲観したことを覚えている。

このことについて『流通経済大学三十年史』においては、当時（昭和四四年三月二二日）示された「流通経済大学経営改善計画」の項目の一つに、「大学経営の向上発展のために産業能率短期大学と提携し、教授の交換派遣、教育内容の便宜供与等を行う」と記されている（一六三頁）。この産能短大との提携問題が多少歪曲して学生を含む関係者に伝わったようであるが、この問題を契機に本学の将来について学内で危機感を共有しながら真剣な議論、対応策の検討が開始されたという。すなわち、開学当初の本学は、自己資金が乏しく多くを出捐者に頼っていたが、そうした外部からの資金に頼らずに学内の教職員が大学経営に責任を持って運営に当たるという方針の大転換が行われたのであった。誕生間もないよちよち歩きの本学が佐伯教授を中心に教職員主導で「自立」を目指し、大学を運営するその後の姿が形成されたといえる。

とはいえこの後も新設の小規模大学の苦難は続き、何とか経営が安定し、規模の拡大路線を取れるまでに自立するには、開学から約二〇年の歳月を要した。この間の教職員の皆さんのご苦労には、後進として感謝と敬意を表するしかない。開学の初期に起きた大学の存立の基盤を揺るがす大きな出来事は、教職員、学生の本学への帰属意識と愛校心をいやがうえにも高め、常に危機意識を共有しながら大学の将来を切り拓こうとするその系譜は、今日まで脈々と受け継がれている。さらに本学は、バブル経済の崩壊、リーマンショックの到来など、多くの苦難と直面、そして乗り越えてきた。実際、私自身も新入生の時のこの強烈な体験により、母校がなくなるなどという悲劇をいかに防ぐかの一念で今日までやってきた。

振り返ってみると、私には大学生生活の初年度の出会い、体験がその後の人生に大きな、ある意味で決定的な影響を及ぼしたのかもしれない。一八歳で本学に入学、卒業後に紆余曲折を経て母校で教壇に立ち、さらに学

園経営に参画できるといふ幸運に出会えたことは、当人にとっては全く予想外であり、ここまで育てていただいた皆様に感謝しかない。そして毎年、新人生を見るたびに本学での良き出会いによって幸運をつかみとって欲しいとの思いを強くしている。

これからのわが国の私立大学の前途は、決して平穩ではない。種々の大きな困難に直面することは不可避であり、本学とて決して例外ではない。しかし、開学当初に迎えた危機を教職員の団結で乗り越えたという貴重な経験を有する本学は、今後訪れるであろう幾多の苦難も学内の知恵と力を結集すれば克服可能と固く信じている。

〈了〉